

東北圏の中山間地域の再生

里の知恵と技術が宝もの

地元学から住民が生み出す森里川海をつなぐ暮らし再生プロジェクト



NPO法人里の自然文化共育研究所・山形大学大学連携推進室

Institute of Collaborative Education for Sustainable Rural Communities, NPO

出川 真也

Shinya Degawa

多面的・公益的機能の発揮

(水涵養、農産物の供給、ふるさとの原風景(癒し)、地球温暖化防止機能.etc)

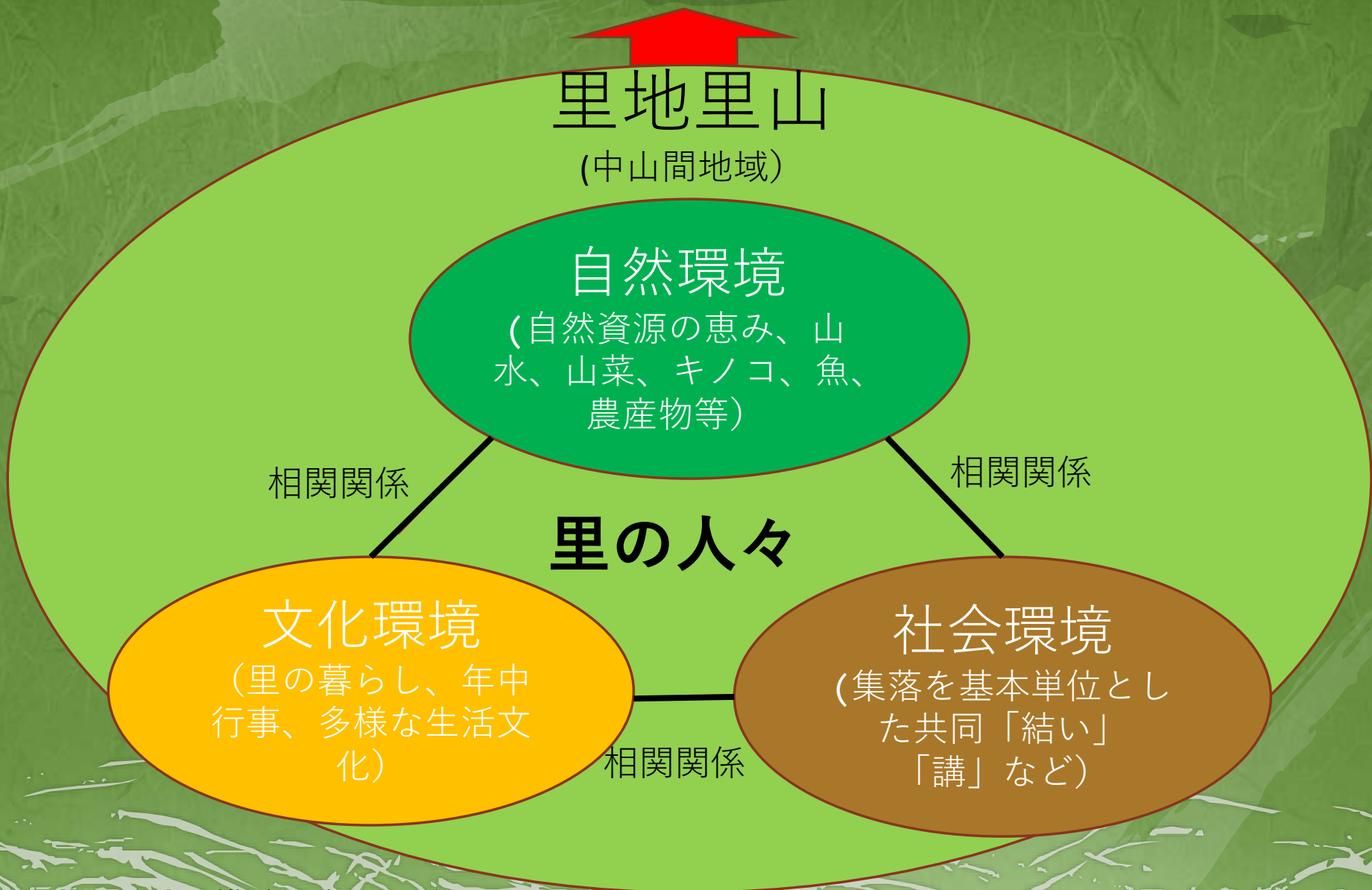


図1:里地里山構成の相関関係

知恵や風習が「宝物」 ～自然と文化を学び、教えることで地域再生～



地元学（地域の環境文化調査）

～まずは地域の「あるもの探し」からはじめよう～
子どもから大人まで地域住民とヨソモン参加で実施



地元学（地域の環境文化調査）

～聞いて、見て、やってみて、調べました～

子どもも大人もじいちゃん、ばあちゃんも楽しくなる



地元学で発見された水辺の生き物達



角川ってどんな所？

□とにかく自然(生き物の数など)が豊富である。



↑冬の時期の角川
豪雪地帯であり、毎年3mほど積もります。



仲間も沢山
いるケロ～



冬の時期のカメ
ムシは勘弁して
ほしいよ・・・

地元で再発見された郷土料理の数々



美味しいものがたくさんある！

～山菜料理のレシピが100種類以上～



←冬に備えて瓶詰めなどにして保存。



美味しいお蕎麦もあります。

角川に長期間訪れた人は、大きくなって帰っていく？

地元学（地域の環境文化調査）

皆で発表会。調べたものを地図にまとめて今後の活動を話し合う。
集落の将来の夢を語り合いました。



子供から大人、じいちゃんばあちゃんまでみんなで語り合いました。

角川里の自然環境学校の設立へ

最上郡戸沢村角川地区は

- 豊かな山と川に囲まれた日本の原風景を残す農山村
- 里の環境に根ざし貴重な自然や文化が息づく農山村

課題；地域の財産が受けつながられないまま廃れようとしている



角川里の自然環境学校の設立

□ 地域住民が「里の先生」

地域文化（知恵や技術）を担う住民が活動の中心

□ 地域の自然や文化を再発見

農山村の未来に向けて子供達に教え伝える取り組み

□ 住民主体の新たな地域作りを行う地域運営学校

組織構成

角川里の自然環境学校は、
角川14集落の「里の先生」を中核に、6学校と4部局で構成。

- 山の学校
- 川の学校
- 食の教室
- 農の学校
- もの作り塾
- 民話・昔遊び塾
- 研究部（コミュニティ活動・環境保全/地域資源研究部）
- 交流部（里親委員会、ヨソモン交流会館）
- 探検部（南部里地探検隊）
- 応援部（自然学校サポーター ※主に高校生と若手社会人）

山の学校：散策会 一里山の文化を結び付けて学ぼうー

もの作り材料集め、炭焼き窯体験、ブナ林散策会



山の学校：ログハウス建設

子ども達の里山・農村学習の
拠点になっています。



里山散策会から得られた子ども達の
着想を元に、地元おじさんたちが計画

山の学校：炭窯作りの復活



地域の技術の再発見と活用、後継者の創出

川の学校



田んぼの学校



田んぼの学校ができたきっかけ



トウホクサンショウウオ
オです。

きれいな水に住むといわれている。サンショウウオの群集落を発見！その他にも、数多くの生き物たちが・・・

郷山田の生き物たち！



何ば、捕まえだ
や？



沼エビ捕まえ
た！



ビオトープ



生物生息地の再生

ドイツ語で生命を表す（バイオ）場所
を表す（トポス）を組み合わせた造語

角川には13ヶ所作成済み!



農の学校：畑の学校（野菜作りと里山保全活動）



食の教室



地域伝統の食の技術が
新たな産品開発へつながる

もの作り塾

里の素材を生かしたもの作り塾を開催。



角川民話塾

～角川弁で語られる地域の人々の心に残る言い伝えから学ぼう～



里親委員会の取り組み

地元もヨソモンもみんなで里の自然や文化を伝え、暮らしを共有したい



ふるさとの原風景を元気付ける取り組みは地域もヨソモンも協働でかかわりうるもの。
結果として交流人口が拡大しています。

※外部参入者のことを親しみを込めてヨソモンと地元では言います。

学習旅行の受入れ



里地里山の地域と連携する活動作りのポイントとは？

まずはよく地域を調べること、地元の方の話によく耳を傾けること。ここから始まる。

□ (1) 住民主体の地域計画作り

(ヨソモンの目線の違いを活用した地元学調査とヴィジョン作り)

□ (2) 日常生活に立脚したプログラムとカリキュラム作り

□ (3) 里の何気ないありふれた素材をエンパワーメント

(保全とエンパワーメント コミュニティビジネスへ)

□ (4) 人材育成 (担い手育成)

そこにすんでいるおじさん、おばさん、じいちゃん、ばあちゃんが元気に暮らすことが一番の人材育成。そこに若者は引き寄せられてくる (かもしれない)。

問題や課題は地域にあるが解決策も地域にある。

しかし、それよりも地域にある価値を受け継ぎ革新していくというスタンスが大切。

活動の輪を広げて～NPO法人 里の自然文化共育研究所の設立

広域連携・多主体連携、そして都市住民との協働へ 「森里川海都市をつなぐ里づくりネットワークプロジェクト」

海の拠点(酒田市)
海の地元学
と食文化交流

川の拠点(最上峡)
森林再生と
川の体験活動

海辺の拠点(三瀬)
海辺の地元学と
自然体験・保全活動

山・里拠点(角川の里)
里地里山保全活動

しな織の里
伝統工芸品
と里山研修

都市部(山形市・仙台市)
青少年体験活動市民団体
との連携

里づくり活動をより広域に、より多くの
の人々との協働で進めていこう！
活動の広がりと深まりを目指して「里
の自然文化共育研究所」が活動を開始！

コミュニティビジネス広域連携ネットワーク

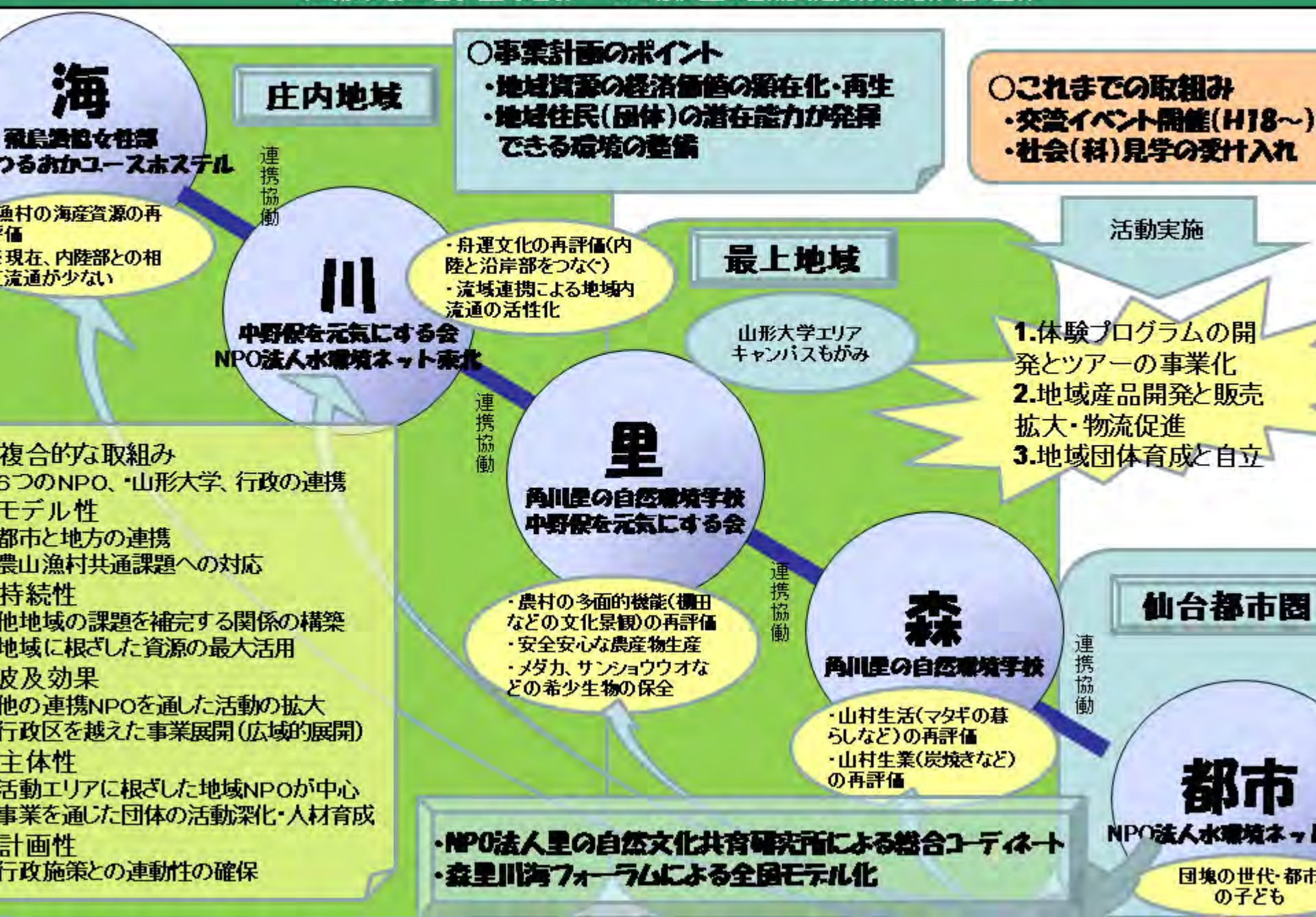
最上庄内エリア関係団体位置図

一地域活動団体を介したツーリズム拡充と産品販売促進網構想一

赤：地域活動団体
黄：中間支援NPO



森・里・川・海・都市をつなぐ地域づくりーふるさと資源による暮らし再生プロジェクトー
(山形県最上地方・庄内地方)ーNPO法人里の自然文化共育研究所 他6団体ー



戸沢・角川地区 × 酒田・飛島法木地区

住民同士が初交流

戸沢村角川地区で
採れた山菜を酒田
市飛島法木地区の
住民に紹介するな
どした交流会
＝酒田市飛島



戸沢村角川地区の住民が九、十の両日、酒田市飛島を訪れ、法木地区の住民と交流した。森の角川と海の飛島の住民同士が、互いの埋もれた「宝」を探し出し、地域活性化の足掛かりにしようとの試み。初の交流となった今回は、互いに郷土料理を出し合い、味わうとともに、意見を交換した。

角川地区の自然環境学習グループ「角川里の自然環境学校」(斎藤久一代表)では、活動を行っており、去年、メ住民が「里の先生」となり、ンバーが飛島に行つて県漁業地元の文化や伝統などを次世代に伝えている。二〇〇六年協同組合飛島支所女性部(斎藤栄子部長)と交流。その後、からは同学校の研究部が、活今回の話がまとまった。

森と海の宝地域の力に

郷土料理出し合い、意見交換

交流活動には、同学校と、同学校研究部が昨年、設立した特定非営利活動法人(NPO法人)「里の自然文化共育研究所」(大山勇理事長)、同女性部の関係者約二十人が参加。法木会館で開かれた郷土料理交流会では、角川地区の住民がフキの煮物やミズのとたきなどの山菜料理を出したのに対し、飛島側はスルメイカの煮物やサザエのつぼ焼きなどを披露した。

また、飛島では間もなく、トビウオの焼き干し作りが本格化するが、調理過程で欠かせない炭が不足している。一方、角川地区はナラを用いた「日山白炭」の産地として有名。そこで、トビウオの焼き干し作りに日山白炭を利用してもらうきっかけにしよう、と、四十五分を提供した。

里の自然文化共育研究所の出川真也専務理事は「山と海が一緒になったときに発揮される力に可能性を感じた。事業化に向け、角川の山菜と飛島の魚を用いたレシピを開発してはどうかといったアイデアが出ていたと話していた。

2008年
6月13日
山形新聞
記事より

地域住民と多主体連携による地域計画作り

- (1) 地元から学ぶことを通して、地域の意思決定は地域で
という基本スタンス
 - ・ 教える、指導する「教育」→共に学び育てる「共育」へ
- (2) 自律と自治
 - ・ 外部の目線の違いも活用しながら自分たちで調べる、自分たちで決める。外部の力も借りながら活動できる仕掛け
- (3) 地域NPO組織を育てることの重要性
 - 連携する地域パートナーが育つ環境づくり—
 - ・ 多様な主体の連携調整
 - ・ 市町村域・県域を超えた連携へ